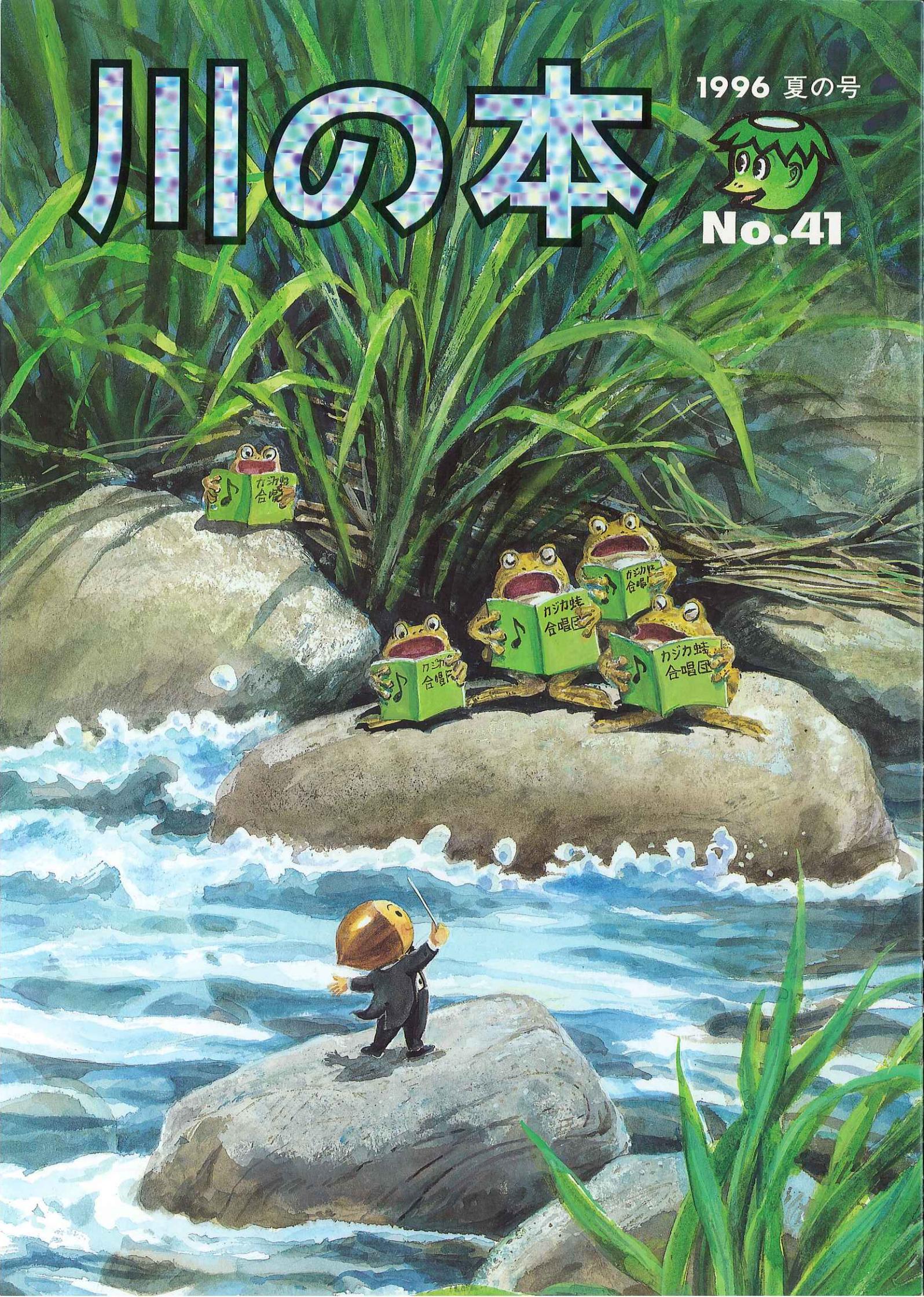


1996 夏の号



No.41

川の本





ひとくわぼり

(伝説、福岡県嘉穂郡)

三百年ほどむかしのこと。

いまの福岡県嘉穂郡嘉穂町あたりでは、嘉麻川をはさんで、東がわの田は黒田の殿さまの土地で、西がわの田は秋月の殿さまの土地でした。ところで、嘉麻川も黒田の殿さまのものでしたので、東の田と西の田では、天と地ほどのちがいがありました。



嘉麻川の水をたっぷりつかえる 東の村からは、田うえがすむと、お祭の笛やたいこの音が、びいひやらどんどんと たのしげに聞こえてきます。しかし、西の村では、嘉麻川の水をつかうことを禁じられていたので、雨がふらなければ 田うえもできません。

「天の神さま、どうか どうか、雨はふらせてくださいませ」

西の村の人びとは、まい年のように 雨ごいのたいこを どことん どことん と かなしげにうちならし、神だのみするしかありませんでした。

ある年のこと、いつもの年よりも日でりがつづき、田は からからにかわききっていました。西の村の人びとは もう、雨ごいのたいこをうつつ気力さえなくなっておりまして。

村には、村びとから親しまれている 正人どん という医者がありました。

そこには 元気をなくした村びとが、病気でもないのに つぎつぎとたずねてきます。

「正人どん、家じゅうのみんなが よわちちよる、なんとかしてほしか」

「うつつむ、そついわれても良薬はなか。しかしのう、一つだけ方法がある。水じゃ、水さえあれば、みんな 元気をとりもどすじやろうに」

正人どんは 考えぬいたすえ、ある決心をして、でかけるしたくをはじめました。正人どんのおくさんは、心配になってたずねました。

「まさか、黒田の殿さまに 水をひくお願いばしに、でかけるのではなかと でしょうね」

「わしは医者じゃ、村びとを救うには、ほかに方法がなかけんね」

「秋月の殿さまからでさえ、聞きとどけられない願いごとを、おまえさまが申しでたりすれば、ぶれいもの といつて殺されるかもしれません」
おくさんは泣きながらたのんだが、正人どんの決心は固かった。

「こらつ、おぬしごとき いなか医者に、殿が会われるわけがない。おとがめをうけないうちに 帰れ 帰れ」

いくら 門番が、おいはらおうとしても、黒田藩福岡城の門の前にひれふした正人どんは、びくりともうごかず、殿さまの駕籠がとおるのをまらしました。



三日、四日とたちました。そして五日目、やっと 殿さまの駕籠がでてきました。

「お殿さまに、お願いがござりまする」

おとものさむらいに、けちらされながら、正人どんは大声をはりあげて、必死でさけびつづけました。その声は、殿さまにもとどきました。

「そうぞうしいが、なにごとじや、駕籠をとめろ」

正人どんは、頭を地面につけたまま、必死で西の村のくるしみを訴えました。

「せめて、一くわはばの水を、秋月の地にもお恵みくださりませえ」

「なんじやと、一くわはばの水で、百姓三百の命が助かると申すか。そのことば、いつわりなかるうな、ならば、一くわはばだけ許してとらせる。しかし、くわ一はばを、けつしてこえてはならぬぞ、よいか」

「ありがたきしあわせ、正人、命にかけて約束いたしまする」

こうして、正人どんは、一くわはばのみぞを掘る、お許しの証文をもらって、よろこびいさんで、村へ帰っていきました。

嘉麻川の水を田にひけるといので、西の村では大さわぎです。

「ありがたいことじや。しかし、たったの一くわはばではのう」「正人どんは百姓でないけん、田の水のことは、わからんとよ」

村びとは、一くわはばと聞いて、がっかりしました。

しかし、正人どんによび集められた日、みんなは、「おうっ」とおどろきの声をあげました。

いつのまに、つくらせたのか、正人どんがもってきたくわは、なんと、はばが三尺（90センチあまり）もある大きなくわだったのです。

「みんな、聞いてくれ、証文には、一くわはば、とだけなっていて、くわのはばは、きめられてはおらんとです。さあ、いまから、このくわで、みぞを掘ってつかあさい」

村びとたちは大よろこびで、西の田に水がゆきわたるように、三尺はば、びつたりのみぞを掘りあげました。みぞには、嘉麻川の水が、気持ちよく流れこみました。ひからびていた西の田一面に水がゆきわたり、すっかり元気をとりもどした人びとの田うえ歌が、西の村一帯にあかるくひびきはじめました。

三尺はばの、ふかいみぞが掘られたことを知った黒田藩のお役人は、かんかんになっておこりました。

「ばかりおったな 正人め、殿のお約束はお約束じゃが、正人めのはかりごとだけは、ぜったいに許せぬ」

まもなく、お城から二、三人のさむらいが、まるでかけのようにな音もなく、でていきました。

あくる日、村びとたちは、できたばかりのみぞの石橋のへりで、背中から槍でさし殺されている正人どんと、家の庭先で切り殺されている、おくさんと一人息子を見つけました。

村びとたちは、かなしみにくれながら、三人の墓を、西の村や田を見わたせる小高い丘にたてました。

「わしらの村が水にこまらなくなったのは 正人どんのおかげたい」

正人どんの恩は、けっして忘れまい、とちかった村びとたちは、この話を三百年たつたいまも語りつぎ、毎年、八月七日の命日には、「正人どん祭」を盛大におこなっているのです。



嘉麻川といまも残る 一くわぼり

三百年ほど昔のお話というところ、ちょうど江戸時代の初期にあたります。世の中がおちついて、各地の大名家たちがごぞつて、新田をひろくために知恵をしぼった時代です。

大名の力で、大がかりで長い用水路を掘ったり、ため池をつくるなど、川の水をじょうずに使うための努力がはられました。

それだけに、川の管理もきびしく、農民が勝手に水をひくことなどできません。水の配分をめぐる、農民どうしの争いも各地でおこりました。農民にとって、川の水を使えるか使えないかは、天国と地獄ほどの差があったのです。たとえ1mにみえない小さな水路でも、人々にとってどれほど大切なものか、一くわぼりのお話からもよくわかると思います。

お話にてくる嘉麻川は、遠賀川の上流部にあたります。福岡県のはぼ中部を縦断して流れる遠賀川は全長61km。二千年もの昔から、この地に稲作文化を育て、現在も筑豊地帯の水田に水を運びつづけているのです。

遠賀川の果たした役割は、こればかりではありません。かつて、明治時代、近代工業のエネルギー源であった石炭を運ぶ、川の流れとしても活躍し、最盛期には、六千五百隻ものひらた船が行き来しました。当時は、石炭を洗った排水が流れ込み、川が真っ黒にこぼっていたため、「ぜんざい川」とよばれたこともあるそうですが、現在はきれいな水が流れています。

一くわぼりのお話はもちろん、もつと昔のことですが、いまも一くわぼりの一部が保存され、その記念碑もたてられています。

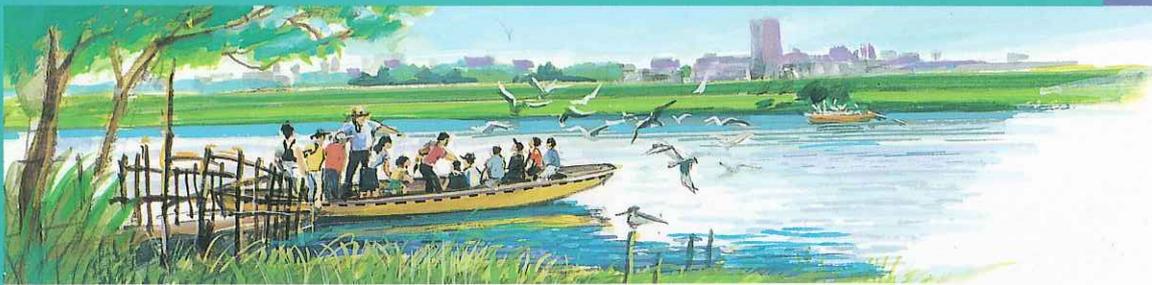
正人どん一家の墓をたずね、細い山道をのぼると、林のなかの太い木を背に三つの墓石が寄りそうように、ひっそりとたっていました。

墓の周りにはきれいに掃き清められ、三つの竹筒に花がいっぱい生けられているのが印象的でした。

取材協力：嘉穂町教育委員会 福岡日出海さん

福岡県

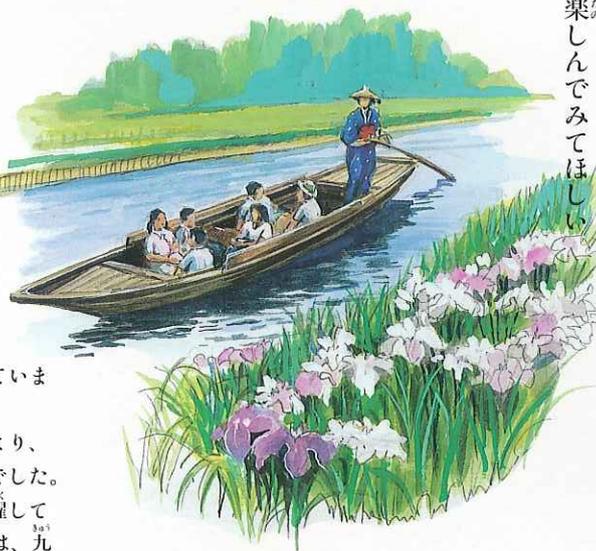




日本の各地には、昔ながらの渡し舟や観光用の舟くだりなどが残されているところがある。近代的な水上バスや遊覧船もある。ぜひ、一度乗って、楽しんでみてほしい。

矢切りの渡し

演歌でも有名な「矢切りの渡し」は、東京近郊にのこる、昔ながらのめずらしい渡し舟で、観光客がたえません。映画「寅さんシリーズ」でおなじみの、江戸川区の柴又と千葉県松戸を伝馬船が結んでいます。ほとんどの渡し舟が消えていくなかで、群馬県千代田町では、利根川をわたる実用的な交通手段として、現在でも渡し舟がのこされています。



潮来のサッパ舟

笹の葉に似ているところから、サッパ舟と呼ばれています。茨城県の水郷の町、潮来では、舟は農作業はもとより、人々の交通手段としても、なくてはならないものでした。現在では、観光客に人気の十二橋めぐりなどで活躍しています。このような、和舟による観光の川めぐりは、九州・柳川の舟くだりなど、各地に見ることができます。

スマートな遊覧船

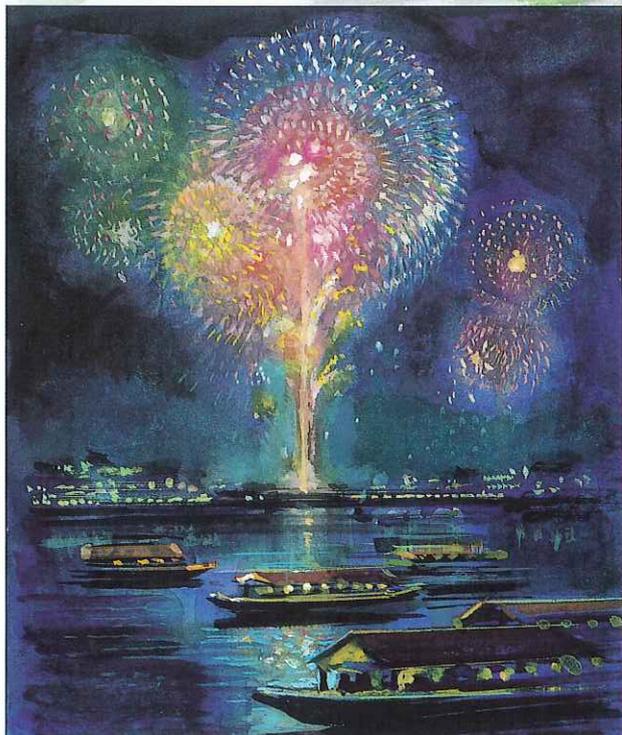
広島市にある遊覧船は、原爆ドームのある平和記念公園前と市民文化創造センター前の二つの乗船ゲートから、太田川と元安川をめぐる。「るんるん」と「すいすい」の名をもつ二隻のスマートな船で、夏はビヤガーデンとしても人気があります。東京の墨田川、大阪の淀川などにも、観光と実用をかねたおしゃれな水上バスが就航しています。



川の伝統行事

両国の花火

夏の夜空を彩る、両国の隅田川沿いで催される打ち上げ花火は、日本一の伝統と華やかさをほこります。およそ二五十年もの昔、両国で川開きのために打ち上げられたのが最初だといわれています。これが当時の江戸っ子の人気をよび、鍵屋と玉屋の花火師たちが、たがいに技術と豪華さを競い合い、日本の花火技術を世界一とよばれるまでに高めたといわれています。江戸が東京とよばれるようになってからも、人気は高く、人は増すばかりで、見物にでかけても、川に近づくことさえできなくなりました。そこで、文通マヒと危険防止のため、昭和37年から中止せざるを得なくなりました。しかし、失われた東京の情緒をとりのぞくと、交通規制や安全管理に万全を期して、このひとときを豪華な両国の花火は昭和53年から復活しました。現在では、日本を代表する花火として、毎年、テレビでも実況中継されています。



沢とあそぼう

沢におりると、緑につつまれる。深呼吸すると、冷たい空気がからだじゅうにしみわたる。すんだ水に足をひたすと、心まであらわれるようだ。さあ、自然児になって、沢歩きをしてみよう。こんなに気持ちよく汗をかけるところはほかにない。

本格的な沢のぼりには、経験のあるリーダーが必要だが、家族で気軽にたのしめる沢もたくさんある。安全なルートを見つけて、二、三百メートル歩くだけでも、たのしみをいっぱい発見できるはずだ。

沢歩きのコツと注意

● はきもの

沢歩き用のフェルト底のウェーディングシューズやワラジ、地下足袋などがベストだが、水陸両用のトレッキングサンダルでもよい。すべりにくいくつをはくと。運動ぐつでもよいが、裸足はさけること。

● 沢歩きは、ぬれるのがあたりまえ。

だからといって、水着だけでは危険だし、虫にさされたりする。ぬれてもよい長ズボンを用意したい。

● 沢は、浅いようでも、流れは強いから、水にふみこむときは、じゆうぶんに気をつける。水底の石のコケなどですべることがあるし、石がぐらつくこともある。岩から岩へと、とびうつることも、危険だ。

ぬれるのをかくごで、川底をゆっくりスリ足で歩く。

● 上流にダムがある場合、放水などで、一気に増水することがある。そのようなところでは、注意の看板とスピーカーがあつて、放水時には、危険を知らせてくれる。かならず、指示にしたがい、すみやかに沢からあがること。

● 雨がふっていたり、雨がふったすぐあとは、その場ではたいした雨でなくても、水の流れは急にはげしくなる。そんなときは、すみやかに沢からあがること。

● 沢をよごさない

食事のあとかたづけは、きちんとすること。ぜったいに自然をよごさないよう心がけよう。

みず
水のトンネルだあ

ちがうよ
お母さん
木の枝だよ、ホラ



ここで
ひるめしにするぞ

きゃー
へびがいるう



かわへ行くとき これだけは守ってほしい

- ・一人ではぜったい行かない。・友達とでかけるときも大人の人といっしょに行く。・人のいないところでは遊ばない。・行先はかならずつげて行く。・人のいるところで石をなげない。・おやつやおべんとうのあとかたづけはきちんとし、ぜったいちらかさない。
- ・切れた釣り糸なども捨てないでもちかえる。



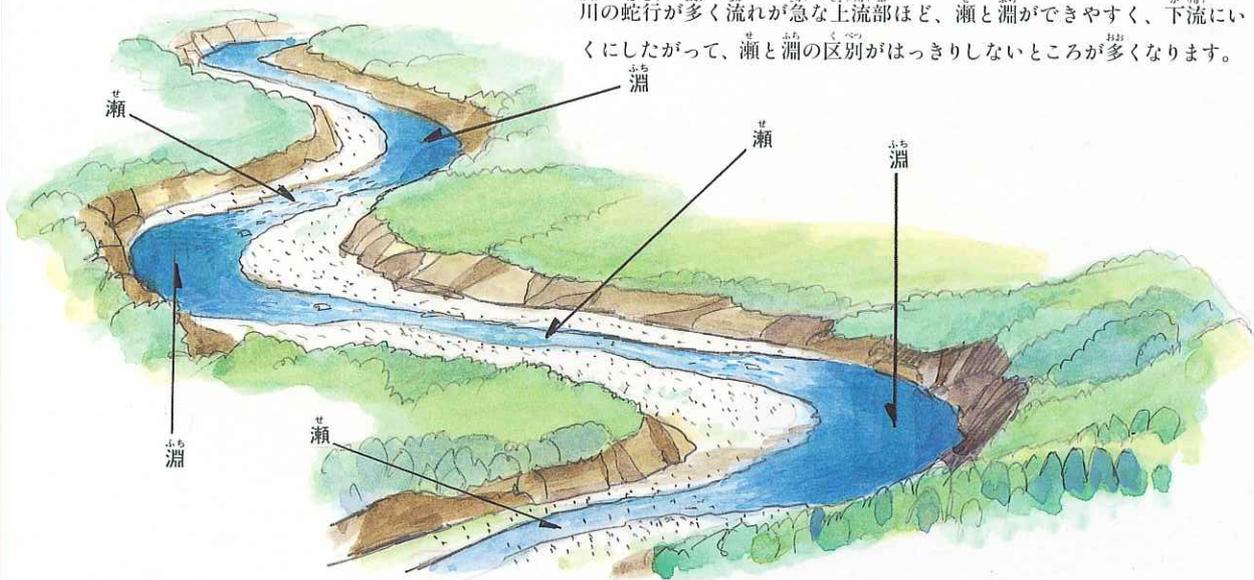
瀬と淵

川はそれぞれ違った形をしていますが、自然の川にはかならず瀬と淵があります。学問的には、いろいろな分類のしかたがありますが、ここでは、一般的な瀬と淵のすがたを説明します。

まず、淵から見ていきましょう。
大きな岩のまわりや滝の下、川の曲がり角などに、水の流れにえぐられて川底が深くなったところができます。これが淵とよばれる部分です。水の流れがゆるやかで、魚たちの避難場所になったり、のんびり休憩する場所になったりしています。

では、瀬とはどんなところでしょう。
川の流れの中で、一つの淵からつぎの淵をむすぶ、ほぼまっすぐな部分が瀬となります。瀬は、淵にくらべて川底も浅く、水の流れは速くなります。瀬には川虫や藻などが多く、魚の餌場となっています。

川の蛇行が多く流れが急な上流部ほど、瀬と淵ができやすく、下流にいくにしたがって、瀬と淵の区別がはっきりしないところが多くなります。



河川愛護月間

7月1日→31日

8月1日は水の日です

河川環境管理財団は

みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

- * よりよい水辺のプランニング
- * 楽しく安全に遊べる川づくり
- * 川をきれいに、川を愛する心を育む運動
- * 未来の水辺を考えた調査や研究
- * せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。